森コラム 44

カタカナ語

理事長　森　勉

最近のコロナ禍、パンデミック（世界的大流行）、アウトブレイク（突発的に集団で発生）、東京アラート（東京で感染拡大警報）、ステイホーム（家に滞在）、ソーシャルディスタンス（社会的距離）、オーバーシュート（爆発的な感染拡大）、クラスター（感染者集団）、ロックダウン（都市封鎖）等聞き慣れないカタカナ語がマスコミ等で頻繁に飛び交っています。高齢者には理解困難でデマやフェイクニュース等に惑わされ一部にはマスク等の買い占め騒動が起きています。

西欧文明に直接触れた江戸時代の阿蘭陀（おらんだ）通詞が、引力、遠心力、動力、分子、物質、惑星等の科学用語を翻訳した以降の近代において三度に渡って日本語の有り様が大きく問われました。明治維新後には欧・米言語に対する語彙が大幅に欠けていたため政治、裁判、交通、通信、機械、電気等1万以上の和製漢語や句読点、接続詞、代名詞等が作られました。大東亜戦争敗戦後には当用漢字別表・音訓表・字体表、人名漢字別表、送り仮名の付け方等が定められました。1980年代以降には外国人に対する日本語の教育体系、コンピュータへの日本語入力体系の開発等国際化・IT化に対応する努力が継続されています。

中国唐代の僧玄奘は仏典を翻訳する際、幾つかの理由から五種不翻（ごしゅふほん）という考え方で漢文に訳さず梵語の音をそのまま漢字に写した今日においては外来語をカタカナ表記にするのと似たような音写という技法を用いました。五種不翻とは、既に古い例があり衆人によりその意味が知られている言葉（順古故（じゅんここ））、真言等の甚深微妙で不可思議なる仏の秘密語（秘密故（ひみつこ））、多くの意味を含む言葉（多含故（たごんこ））、中国にない意味や言葉（此方無故（しほうむこ））、般若や仏陀のような敬心を保つことが難しい語類（尊重故（そんじゅうこ））は翻訳しないという考え方です。

一般的にカタカナ語は新鮮な感覚を与える傾向があるためコロナ禍においてもマスコミ等では和製漢訳語の作成、漢字制限や表記法の統一による日本語の簡易化等の努力を行うことなく外来語を安易にカタカナ語として使用する事が多く国民の理解を困難としています。既に日本語としてある専門用語のカタカナ語の乱用は豊富な知識を喧伝し、国際・IT化時代の象徴であるカタカナ語の使用に便乗して時代を先取りしていると誇示しているようで不愉快に感じます。五種不翻のような明確な理念に基づく外来語の導入によりわが国文化の神髄である美しい日本語と民族の品性を守りたいものです。